

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

IS (インフィニット・ストラトス) 『mother&sis
ter's complex』

【作者名】

CAGED BIRD

【あらすじ】

姉はヨダレで殺された・・・そして私は鼻水で殺された

神によってころされた主人公が今ここにISの世界に転生する

第零話

プロローグ・A lady can die but once .

【少女は一度だけ死ぬことができる】

＝ 転生フラグですね？わかります。

第一話・they obey those who toret
hem out of the soil .

【彼らはひっこぬいた者に従う】

＝ 私はひろってくれた人について行きます。

第二話・Mankind is a species that
contends , envies others , hate
s others , and cannibalizes .

【人類は、競い、ねたみ、憎んで、その身を喰いあつものだ】

＝ ママがいればそれでいいよ？

ステータス・The more you shed tears ,
the stronger you can be .

【涙の数だけ強くなれます】

＝ 神様からのチートでわっしょい！

第三話・Her skirt cannot be blown
by the wind , no matter how str
ong the wind might be .

【彼女のスカートはどんなに強い風が吹いてもめくれない】

＝ 変態にみせるものなんて何もないんです。

第四話・I learned of a curse , and
couldn't sleep that night , be

cause I was scared .

【呪の言葉を知った夜は恐くて眠れませんでした】

〃 おかーさんがいないと私は授業中眠ることさえできません。

第五話・the underwear a girl wears

is said to influence the outcome of her love .

【彼女の恋の行方はパンツが握ってるそつな。】

〃 好きなら好きなりに攻めればいいのに。既成事実をつくっちゃばいいのになんでやらないんだろ？

プロロクグ A lady can die b
ut once .

side

姉が死にました。

父、母と一緒に泣いたのを覚えている。

死因はよくわからない。原因も不明。遺体は全身の穴という穴から血をだしていた。わかっているのはそれだけ。あと、姉の友人さん（おまけ）も同じようにいなくなってしまった。こちらはどうせもよいが。おまけの分際でお姉ちゃんの横にいた罰だと思ってしまうて反省した。

犯人もわからずじまい。ニュースにもとりあげられ、警察のほうでも大規模な捜査がおこなわれた。・・・しかしなにもわからず。

そして、事件から現在。5年がたった。

「ひ？」

目の前に半裸で土下座している老けているようにも老けてない若いようにも若くない老人のような若者のようでもある自称神がいます。

「すみません、あなたを殺しました」

…なんかふざけたこと言ってないかな？

「は？」

…まあ、おちつけ…とりあえずさきをうながさないよ

「はい、あなたの姉と同じように」

…は？なんかふざけたこと聞いたような？

「もう一回言ってもらえるかな？」

「私があなただの姉と同じように間違えて殺しました」

…よし犯人みつけた…この日のためにいろいろと鍛えておいてよかった

とりあえず殺そう

しばらくお待ちください

(バキッ、バキッ、グチャッ)「ギヤーツ」

「なんで?なんでなの?なんで?なんで?なんで?なんで?
なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?
なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?なんで?
でよ!!!!!!」

しばらくお待ちください

「なにこいつ・・・どんだけちぎっても砕いても元に戻るんだけど」

「だって俺、神だs「しゃべる余裕あるんだ?」・・・グハアッ」

「なんでお姉ちゃんなの?ねえ?だしてよ!神なんでしょ!」

「いや、む」「はっ!」「ギヤアアアアア」

しばらくお待ちください

「で、あんた・・・まちがえたってどういうことかな?」

「ハアハア・・・えっと、あなたのお姉さんの場合は私のよだれ、あな
たの場合は鼻水ですね・・・最近鼻炎で・・・グハアッ!」

「そんな!そんな理由で姉と私が」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
しばらくお待ちください

「ふう……そう、要約すると、私の姉とおまけは他の世界で頑張ってるわけね？」

……グスン

「はい、そうです」

「で、私も一緒にお姉ちゃんの世界……っていつのも無理なわけね？」

……さびしくなんか……さびしいな

「はい、その通りです」

「で、私の行く世界はIS、インフィニット・ストラトスの世界なのね」
「？」

「はい……はい！その通りです」

「で、願い事は1つまでと……っね

「え？……そんなことはでκ」「……できます！はいっ！」

「わかればよし！じゃあ……っって感じをお願いね」

「わでいいよね？お姉ちゃん……」

「はい……わかりました！」

「じゃあ、行ってくるね？」

と、言い私は目の前の扉を開けその中に入って行った

Side END

第一話

They obey those
who're them out of the

soil.

side

樹里

「じいさんでいいだろ」

「そだね・・・じゃあ、樹里？お父さんとお母さん、ちよつとじいさんとあ
るからじいさんでおとなしく待っていてね？すぐに戻って来るから」

「・・・」

「ほむっ、くそっ」

ぼーっと空を見てた。

何も考えることもできず、ただただ自分の両親が自分のもとに帰っ
てきてくれることを待っていた。

何時間たつても何日たつても待ち続けた。

誰も来てはくれなかったが。

そつした中で気付いた。

気付いてしまった。

いや、最初からわかっていたのかもしれない。

捨てられたのだと。

気のせいだと思いたくもなかったが、そうした現実を消し去ることは私にはできなかった。

転生してなにもなく過ごしていけると思ってたんだけど。

生まれ変わった家は不幸なことに貧乏だった。

・・・私を育てられないくらい。

不思議と涙は出てこなかった。

原作ぐらいまでは生きていけると思っていたんだけど。

ここで終わりなのかと思ってもみた。

ここは一応森の中だが人は通る。

だが幽霊だとかそういう類いのものだと思われたのか話しかけようとしても逃げられる。

追いかけてようにも生まれつき足がそんなに強くなかったので、歩けはするが走ることなどではしない。

それに、数歩あるくだけで体力の限界がくる。

大きな声をだすのも苦手だ。

助けを呼ぶこともできないのは最初からわかっていた。

歩くだけで疲れるのだからじっとその場にいたほうがいい。

ただ、そんな中でさえ思ってしまうことが一つ・・・

お腹すいたな。

＼ side END 〉

＼ side 三人称 〉

その日、篠ノ之束は珍しいものはないか散歩していた。

そして、道端に落ちていたかわいらしい人形らしきものを見つけた。

「ん〜綺麗だね〜洗ったら篝ちゃんのお土産になるかな？」

【注・落ちていたものを妹のお土産にしないであげてください】

すると、人形らしきものが束のほづに顔を向けた。

「うわっ、束さんびっくりしたな〜！君だれなの？」

「じゅじゅ」

「じゅりちゃんか、そうか、うん、じゃあね。」

篠ノ之束は笑顔で歩きだそうとした。

「じゅりちゃん？はなしてくれるかな？」

服の裾を人形らしきものがつかんでる。

「・・・」

「ん？えっと、一緒にくるかい？」

「くり、人形らしきものが首を縦にふった

「じゃあ、君のお母さんになってあげよう、せーの！」

「？」

「おかあさん、ママ、ママ、母上、奥様？わかるかい？束さんが君の母になってあげるといってるのだよ。」

「ママ・・・」

……………「じつして、樹里は篠ノ之束に拾われ篠ノ之樹里となった

【やり取りの不都合は受け付けない！】

～side ENZO～

第二話

Mankind is a species that contends, envies others, hates others, and cannibalizes.

side 樹里

篠ノ之束もとい、ママの娘になって次の日、織班千冬さんに紹介されていた

「束……貴様、どこの店からとってきたんだ!!」

あれ？まず人として思われてない？

「ちーちゃん？きーちゃんはね？女の子、人間だよ？ちなみに私の娘なのだ」

そうなのだ。昨日帰ってきてなにやらやっていると思っていたら、戸籍的にも娘になっていた。苗字もしものものになり、しものものじゅりになったのだ！

「なっ!?!……すまない、はじめまして。私の名前は織班千冬という」

あれ？人だったらどこから拾ってきたとか聞かないのかな？

「あの……えっと……その」

「落ち着け、深呼吸しろ」

!?!この人の目、こわい……ママ助けて

千冬(?!)

「ちーちゃん？きーちゃんを泣かせちゃ駄目だよ？」

ママに抱きしめてもらえた……

「なっ?!私はないもしてないぞ?!」

「ちーちゃん？その目つきだと思っつよ？」

「これは生まれつきだ！」

「ほらっ きーちゃん、こわくないから」

「え……あ、うん……しなののじゅりっしやい……えっ……」

あう、かんだ……

「よくできました」「なでなで」

ママになでてもらえた〜 あふあ〜

「そんなことよりも」「そんなことよりってなんだい」「……」

……すまない、今日も『あれ』の実験をやるんじゃないのか？

「うん やるよ〜」

「あれってなにかな？」

「ふふん 見てのお楽しみだよ」

「なっ!? いいのか? 見せても」

「いいんだよ! いいんだよ! この天才束様の娘だもん きっと理解できると思っよ」

「…………お前がいいならそれでいいのだが」

「……なに?」

いつもいる場所より奥の方につれてこられたのだがよくわからないところなのだ

周りを見渡すが、何かゴチャゴチャと散乱して

黒い布切れまで散乱している。食べかけのお菓子とかもなんかないし……

「天才束様の秘密実験室」

じゃじゃ〜ん、と効果音がでそうな声でそう言っていたが……

まあ、よくわからないので聞いてみる

「ママ? ……なにで何作ってるの?」

「それはね? ……皆で宇宙へいってマシ〜んだよ」

「え?」

よくわからないので隣のオリムラっていう人をじっと見つめてみ

る

「安心しろ、私も分からないから」

うん、全く安心できるところがないね。

おかーさんは胸をはって、よくわからないけど満足気だったのでそれでいいのかもしれない。まあ……前世の知識的にはISのことなんだろっけども。

「ん〜と?」これってロボット?」

「おおーおしいぞ これはね……………」

ためますね。さすがはおかーんです。

「インフィニット・ストラトス 略して、ISだよ」

おかーさん、普通それだけじゃわからないよ?

「まあ、あれだ。ロボットではないがパワードスーツみたいなものだ。わかるか?」

うん、普通の5歳の子供だったら分からないと思いますよ?

「ママーす〜いんだね」

「えっへん」

す〜い誇らしげだよ……

(いんいん)

ん〜

「そしてこれが設計図だけどわかるかな？わかるよね？すごいでしょ」

おおーこっとなってるんだ。前世のままじゃ絶対わからなかったけど知識チートってすごいね。ISのコアについても理解できる。……けど、あれ？こっつて…

「ママ？こっただけ？」

「ん？どうしたのかな？」

「あのね？あのね？つなぐとこ間違えてないかな？」

「そんなことないと思うんだけどな？……あれ？」

「ね？こっつちをつなげてこっつちにつなげてたのをこっちにつなげたらいいと思うんだけど…間違ってるかな？」

なぜこんな間違いをしてたんだろ？まあ、どうせ後で気づいただろうが。

「!?すっ〜ごい！さすがは東さんの娘だね　きーちゃん！さあ、ハグハグしよう〜」

!?あふへみゅ〜／＼／＼また抱きしめてもらえた〜　今日もいい日だなあ〜

「……で、だ。樹里、もしかして性能に問題あったりしたのか？」

「あふあ、にゃ？えっと、腕とか足とか動かすのにすごい力を入れないといけなくなってたはずですけど、こっつちを直してたら前よりも

楽になると思いますよ?」

「……そして、東。言い残すことは?」

「ちよっ! きーちゃん!? なんて言っちゃんつ! ……ちーちゃん! めんってば!」

なにやらバタバタしてますがそんなことはいいでしょう。そんなことより私、ここで気のきいたことの一つも言えないなんて駄目な子ですね。えっと、もうどうでもいいですね。ごめんなさい。私自身がどうでもいい存在なんで私なんかを原因でけんかしないでください。私なんてゴミクズですね。ごめんなさい。いい子じゃなくてごめんなさい。ごめんなさい。なんで私ここに存在しているのかな? 自分で勝手にごめんなさい。ごめんなさい。余計なこと言っつて、死んだほうがいいかな? ごめんなさい。愚図で駄目な子でごめんなさいワガママ言っつてごめんなさい。こんな娘でごめんなさい。私が生まれてこなければ誰にも迷惑をかけることなんてなかったのに。私はすごく嫌な子だよな? ホントに死んだほうがいいのかな? うん、そうだよな。こんな駄目な役立たず、必要ないよね?」

バチンッ

え?

いつのまにか二人とも黙ってこわいです。

「きーちゃん? なんてそんなことなのかな? かな?」

ママ、恐いです。あと、声にでてたんですね。でも、間違っていないですよな?」

「だって、私が、私が余計なことを言ったせいでオリムラさんに怒られて、私なんていなければ！私なんて！わ、そんなことないよ」「た……え？」

「そんなことないよ？きーちゃんのこと私は必要だよ？いて欲しいよ？」

また抱きしめてもらえました。ホントに幸せです。

「だから死んだほうがいいなんていわないでね？」

ホントに今日はいい日です……………

～side END～

「…………寝たな」

「ちーちゃん、しーだよ？あっちいこつ？」

「ああ。」

～side 3人称～

「自分で泣いてたことさえ気づいていなかったな」

「うん、そうだね」

千冬は家族に捨てられ、束は世界に関心を失った。そして、樹里は家族に捨てられ自分を否定していた。

「…………悲しいね…………私達は…………」

「そうだな……」

千冬は力、束は頭脳。樹里も頭脳という才能を持っているのだろうが、それだけなのに。

世界はなんでこんなに世界は、どうして私達に酷いのだろうか……

「ね、この子は私達が……」

Side END

ステータス The more you shed tears, the stronger you can be.

名前； 樹里（じゅり） 篠ノ之 樹里

原作開始時の特徴とか・・・

外見・身長138cm（鉄腕アトムと同じ身長）、スリーサイズB76/W58/H74

長髪ストレート（白髪）、ヴィクトリカ・ド・ブロワの顔（GO SICKより）

一人称；私

国籍；不明

年齢；12

性格；さびしがりや、人見知り、シスコン（殺人鬼なんて知らない）、マザコン（重症）

好き；篠ノ之束、甘いもの、かわいいもの、整理整頓

嫌い；篠ノ之束以外の人（苦手）、苦いもの、おばけ、カレーライス、虫、汚いもの、篠ノ之箒、織班一夏

弱点；花粉症

父と母は日本人だけど、5歳の時に捨てられる。その後、束に興味

本位で拾われる。

名前は刺繍されていたが、苗字は書いてなかったため篠ノ之の性を使わせてもらう、もとい束の子供として育てられる。そして、束に依存する。

ISの研究を手伝いつつ、自分のISも開発する（詳細は別に）

神様特典

転生後の姉と同じ顔（GOSICKのヴィクトリカ）

- ・この願いを願った時点で転生後の姉の顔は知らない。
- ・ブラコンなので姉とのつながりが欲しかった。
- ・転生後姉の趣味が可愛い系なのがちょっとびっくりだった。

マイナス補正・耐久値マイナス補正（けがをしやすい、風邪等になりやすい）

知能並びに知識等の頭脳チート

・コアの精製もできるよつになります。これによってチート開始です。

マイナス補正・身体能力低下、および身体能力上限制限（小学生低学年程度）

記憶維持

- ・前世の記憶をそのまま引き継ぎ、かつ絶対記憶能力者です。

マイナス補正・肉体的成長の制限（12歳程度から止まる）

第三話 Her skirt cannot

be blown by the wind, no matter how strong the wind might be.

いろいろ、ホントにいろいろあって、だいたい7年後のある日のこと。

ある日、ママがなにやら言ってきた。

「学園に行ってきた?」

「やだ」

何をふざけたことを言っているのだから? まず、私は12歳なんだよ? IS学園(高校)? 年上の中に入れと? いやだよそんなの。それに、あれだよな? オリムラなんとかさんっていう人の弟のあの変態がなんかISを動かしたからIS学園に通うとかいう話で、ママの... 認めたくもないが妹の刀振り回す殺人鬼も通うっていう話を聞いたんだけど、もしかしてママに嫌われるようなことしたのかな?

「行ってきなさい。嫌ってないから。ね? ほらっ、泣かないの!」

「ママと離れたくないんだもん!!」グスン

これは本心。転生したわけだが、もうそんなことはどうでもよく、ただママと一緒にいたかった。

「今年は篝ちゃんといっくんが入学するからね。きーちゃんも一緒

に通っちゃいなよ」

「それがいやなんだってば…」

「もーしかたないなー」

あきらめてくれたのかな？今日もぎゅっしてもらいたいな

と、思っていたら首筋に何かをあてられ・・・

次に気付いた時は、どこかの教室に座らせられていた。

……………え？

しばらくの間、ぼけーっとしてると、人がたくさん入ってきた。

みんな遠巻きにこっちをみながらこそそこそ何か喋ってる。

なにこれ、こわいよ。ママ、助けてよ。(；；；(ウウウ

しばらくすると、

「みなさん、入学おめでとつこげいます」

そう言いながら眼鏡をかけた女性が入ってきた。

「私の名前は山田真耶。このクラスの副担任です。皆さん、これから三年間よろしくお願いしますね。」

だいたいこんな感じのことを言っていたと思う。でも、知らないよそんなこと。そんなことより私はなんでこんなところにいるんですか？そして、一年間もよろしくやりたくないです。帰れですよ！

そのあと、あの変態が副担任の人の胸を凝視しつづけ周りをみわらし、おかーさんの妹のほ、ほ、ほ何とかって言う人の胸まで凝視し始め、副担任っていった人（以下眼鏡）が自己紹介を促していたのもかかわらずに、ガン無視をしていた。

「織斑君、織斑一夏君！」

「はい？」

あの変態……本気で聞いてなかったんですね

「アから始まって今才なんだよね。自己紹介お願いできるかな？織斑君の番なんだけど……だ、ダメかな？」

眼鏡が上目づかい＋涙目で変態に迫る。……そんなことしたら変態が喜ぶだけですよ？あつ、それが狙いなんですか？そうなんですか？あつ、なんか自己紹介するみたいだ。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

そして、そこで自己紹介が終わる。……まわりにいる人間達はかさずつつこみを入れている。

別に変態の紹介なんて知ったこっちゃない。なにかよくわからな

す！北九州から！」

「担任が眼鏡かと思ってしにそうになりました

」！

じゃあ、私はあこがれても名前もまとも覚えてないから帰っていいですか？

「毎年これだけ馬鹿ものがあつまるものだ」

このクラスだけじゃないですか？馬鹿じゃないので帰っていいですか？

「おねーさま〜 もっとしかってののしって〜」

「でも、ときには優しくして〜」

「そして、つけ上がらないように調教して〜」

「ペシットにしてください」

「で、あいさつもまともできんのか？おまえは」

で、「ここから千冬の弟だつてばれてからのまたきゃーきゃーなつて
〜の

「し〜ず〜かに！お前たちにはこれから半年でISの基礎知識を学んで
でもらひひ」

もう、覚えてますけど？基礎どころか応用まで。コア作れますよ？
帰っていいですか？

「その後実習だが、基本動作は半月で体に覚えさせろ」

専用機もってるからね〜？動かせるのは当たり前ですよ？帰って

いいよね？学ぶものないよ？帰っていいですか？

「いいか？いいなら返事をしろ！よくなくても返事をしろ！」

「はっっっ！」

あ、もちろん私は返事しませんでしたよ？よくなくても返事っていわれてもよくないんですから。あと、あの変態も返事してませんでした。いつまでぼんやりしてるんでしょっか？

眼鏡がなにかしゃべってるけど、(いそいそ) あ、あった

びびびびびびび

ばっっっっ！

「へっ!?」いたい・・・

「担任の目の前でゲームとはいい度胸だ」

だってひまなんだもん。帰っていいですか？

「じゃあ、退学でいいので帰っていいですか？」

「却下だ！篠ノ之樹里！」

名前でもたざわぞわ。別にフルネームで呼ばなくてもいいんじゃないかな？そして突き刺さる視線。

「えっ、なんで私ここにいるんですか？」

「あいつが学校ぐらい通つとくべきだって言つてたぞ」

「え、私何も学ぶことないですよー」

いや、ホントに。帰つていいですか？

「口答えは許さん！ゲーム機は没収だー」

「だめですよ？人の専用機を教師が没収する権利があるんですか？」

「なっ!?じゃあ、せめて授業中にやるなー」

周りがすごいざわついてるけど、するでいいでしょう。どうせ学校はやめるのだし、関係のない人たちですか(ばしんっ!!)にや!!?

「この学園をやめることは許さん！3年間ちゃんと通つてもらつ！欠席でもしてみろ、留年させてでもこの学校にいさせてやるからな！覚悟しておけ！それと制服はどうした？」

やめさせて下さいよーそれに……

「心の中をよまないでくださいー！気づいたらここにいたんでこの服しか持ってないし持ち物も服に入れてたり元からつけてた物しかないんです！それにこの服も、っていうか持ち物ほとんどがISの待機状態ですね？むしろ全部外したら裸になりますよ？それとも、脱がせたいんですか？こんな小さい女の子の裸がみたいと？そうなんですかね！そうなんですよね？さすが変態の姉でs(ばしんっ!)しゅにやっー」

痛いです。出席簿をこの近距離で投げないでくださいー！

「あ、あの先生。樹里ちゃんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なのですか？」

モブの一人がおずおずと挙手して年増に質問する。

……まあ、篠ノ之なんて名字はそうそうないし、いつかはバレるのはわかってたけど、今ですか。そして名前読みですか？そしてなぜにちゃん付けですか？

「ああ、篠ノ之はヤツ　　篠ノ之東の娘だ」

ママのことをヤツってよばないでください。そしてもうそろそろ帰っていいですか？

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！というか娘!?あの人結婚してたの!？」

してません。ありえませんが、もし近づく男がいたら吹き飛ばしますよ??

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!?やっぱり天才なの!？」

あたりまえです。ママはすごい人なんです！わかったなら私を帰らせるー！

「樹里ちゃんも天才だったりする!?今度ISの操縦教えてよっ」

天才ですが、いやです。年増に習ってください。そしてちゃん付けやめてください。そしておうちに帰してください。

授業中だというのに私の周りに女子がわらわらと集まる。

全く、迷惑です。べっ、別にいきなり囲まれて恐くなったわけじゃないんだからね！

こわくなんてな〜いさ！（ガクガクブルブル）

「はあ〜……お前ら席につけ〜！そんなんでもまだ12の餓鬼なんだから……（ry）」

注意する理由がおかしいですよ？……助かりましたが。しかし、大人しく席に戻ってくれましたが視線が痛いです。特に、変態とか殺人鬼の。

「お前は……まああいつの娘だしいろいろとんではわかるがこの学園では自重しろ。わかったな？」

「やです（ばしんっ！）はう!？」

角!？角で叩きましたか!？痛いですよ!!そしてとんでは失礼ですよ!？」

「わかったな?。」

「……はい。」

どづしてこつなっただら?

ああ、クラスメートの視線が痛い……そして、怖い。帰りたい。

こうして、私の学園生活（監獄生活）が始まった。

そして、ただひたすらに帰りたい、と願った。

第四話

I learned of a course, and couldn't sleep that night, because I was scared . . .

なぜか入学初日からあった一・二時間目のIS基礎理論の授業を終えた。

あの変態が全くわからないとかおかしなことを言っていたけど、あんなの小学生でもわかるんじゃないだろうか？いつも女の胸ばっかり見てるからそうなるんだ！帰りたいたい…

そして休み時間。

皆の視線は変態の方に向いてるわけではなく、むしろさっきの紹介のせいでこっちに視線が集まっている感じだ。……ぜったいに目を合わせるものか！合わせたら力負けする自信がある！そして帰りたいたい！

あの年増の投下した私の個人情報という名の爆弾はナタームだったらしく決して消えてはくれないらしい。

「ちよっぴ、よろしくって？」

あーあー、聞こえてない聞こえてない。なんか口調が変な人が話しかけてきたっばいけど、きつと気のせいだーあーあーあー！

「な、なんですの、その反応は…！」

肩を揺さぶってきた。痛いです。つめ！つめが食いこんでますよ！?

めんどくさい上に痛いので目を上げると、白人らしい真っ白な肌を怒りに赤く染めている貴族っぽいオーラを漂わすドリル人間がいた。そう、ドリルだ。しかも二つも！こんな人間、アニメの中だけ………あーこっつて小説の中だっけ？まあ、ここが現実なんだから思ってもいいだろう。無視、する の選択で間違いはないだろう。そのまま、目線を机に向ける。ママは学校で学べたっていったらしいけど、今学校に来てできることと言えば、一人椅子取りゲーム(要は着席)ぐらいだ。

「なんで泣くんのですの!?!」

ドリルの目が恐いからです。自覚ないんでしょうけど、あなたの目の凶悪さとドリルの破壊力は測り知れないんですよ？

「そのへんでやめてやれよ」

「なんですのー今はわたくしが話しているのですのよ!?!」

!?!二つ前の席の変態が近づいてきました。最悪です。……助かりましたが。

そのあといろいろドリルと変態が話していたんですがよくわからないつち」………

「極東の島国というのは、こつまで未開の地なのかしら。大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で……」ry

なにか私関係ない？よくわからない話になってますし。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ！世界一まずい料理では何年覇者なんだ?!」

勿論、変態も黙っては居ないかった。……私の近くでそんなに怒鳴らないでくれませんか？うっさいです。それにイギリスにもおいしいものはたくさんありますよ？そして、まずい料理があるという点では日本も変わりませんよ？ただイギリスの方が多いただけで。それに私はカレーが嫌いですから、全国共通でカレーを出されたら嫌がりますよ？……関係ない話になってましたね。

そこからは、ずっと売り言葉に買い言葉。いい年して、なに口喧嘩なんかしてるんですか。ホントに子供ですね。

キーンコーンカーンコーン　ここで、三時間目開始のチャイムが鳴った。

「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくって!？」

次は、こっちは来ないで変態の席の方に行ってください。

最初の授業とは違って、年増が教壇に立っている。だけど……

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

「じゃあ、保健室でゲームでもしてていいですか？」

「ほう、教師の目の前でサボリ宣言か！もちろん、却下だ！馬鹿もの！」

バシッ！

ほう、痛いです。年増はもうすこし手加減を覚えた方がいいですよ？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が騒がしくなる。うつさいですよ。この程度のこととでざわつくな！ですよ。クラス代表ですか。要するにめんどくさいことに巻き込まれる、そういうことですね。では、私は関係ないので流しときましよう。私は帰るんですから。

「はいっ。織斑くんを推薦しますっ！」

「私もそれがいいと思いますっ！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺っ！」

変態が大きな声を出して立ち上がる。視界に入らないでください。目が腐ります。

「織斑、席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「私は樹里ちゃんを推薦しまーす」

「私も」

ちょ、まちやがれです。私はそんなのやりたくないですよ!?!……それにいま樹里『ちゃん』って言いませんでしたか？なんでそんなにフレンドリーなんですか!?!やめてください。変態と同じ候補者とか死にたくなるじゃないですか！

「やですーやですから辞退します!!もし駄目だったら、退学でいいですー!」

「ここはちゃんと自分の言いたいことを主張しておいた方が賢明でしょう。」

「却下だ！篠ノ乃娘！自薦他薦は問わないと言っただろう?」

「ちょっと待ってください！ 納得がいきませんわ!」

ドリルが机をたたき立ち上がりやがりました。掘削機の名は伊達じゃないようです。いい音をだしやがりました。それにしても迷惑です。……いや、そのままクラス代表になってもらいたい。でも、ドリルが代表っていつものもどろんなのでしょうか？

「そのような選出は認められません！ 大体、男や子供がクラス代表

だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

は？子供？関係ないよね？屈辱？勝手に味わっていてください。……でも、クラス代表はお断りです。そして、ドリルが代表者になっても恥だと思つたのです。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿や、その猿が推薦する凡人にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわー！」

………は？『実力から行けば』？ないわ。それは、ない。私に勝てるつもりですか？

「決闘ですわー！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

ほう、ドリルも変態さんだったんですね。奴隷とか。何をさせるつもりなんでしょう？いや、それよりも奴隷にさせるっていう考えがでるってことは本国、イギリスのほうではドリル用の奴隷でもいたのでしょうか？いたんでしょうね。女王様とかやってそつですよ？関わりたくない分野の人間ですね。それよりもたしかこのドリル、変態のことを好きになりますね？SとMは裏表とも言えますし好きになってMになるんでしょうか？それを考えたら、変態とドリル、お似合いだと思いますよ？………なんで、私の周りには変態)ママは除く)しか集まらないのでしょうか？

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

と、変態がここまで言うつと耳をすましていただろうクラス中からドツと爆笑が巻き起こる。……なになに？、男が勝てるわけがない？意味のわからない理屈ですね。たしかにISに乗った女性と何も持たない男が戦ったら女性が勝つでしょうが、二人ともISに乗れるんですよ？でも、代表候補生であるドリルを相手について最近ISを動かしたばかりの『ド』がつく素人、しかもさっきの授業でも分かるように基礎の基礎の基礎という名の常識さえも分かっていない変態がハンデをつけるとか……自殺行為ですね。ドリルにハンデを付けてもらうが正解です。そして、ドリルに奴隷にしてもらうがいいですよ？

「じゃあ、ハンデはいくら？」

当たり前です。何を考えてるんでしょう？……いや、なにも考えてないでノリで言ったんでしょうね。帰りたい……。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けてなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女よりも強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

あの、だからあなたは何言ってるんですか？その前提が間違ってるんですよ？日本の男子にジョークセンスなんてものはないですし、基本アホばっかです。まあ、ハンデに関しては同意ですが。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。第三ア

リーナで行う。最初は織斑とオルコットで戦い、勝った方が篠ノ乃娘と戦う。織斑とオルコットと篠ノ乃娘はそれぞれ用意をしておくように。」

あれ？話いつの間にもまとまったんですか？それに私もいつのまに戦うことになってるんですか？まあ、そこについてはドリルが「私最強」宣言をしてくさりやがったので、ぶち倒しましょう。ドリルと変態では、実力的にドリルが勝つでしょうし。しかし、準備といってもなにもなくていいんですが？あと……

「勝ったら退学にしてください」

「だから却下だ！篠ノ乃娘、しつこいぞ！」

ガンッッッ!!!

角……角ですか。痛いです。なんで私だけ、角なんですか。お願いしただけなのに、最悪です。年増のくせに。年増のくせに!!それだから結婚できないんですよ!!

ガンッッッ!!!

「余計な御世話だ、馬鹿もの！」

……だから、だからなんで心を読めるんですか!?最悪です。

「それでは授業を始める」

頭がズキズキするっ……

……「ここからまた、知っていることを解説されるといふ無駄な時

間を過ごした。

帰りたい。

ワタシノカンガエタサイキョウノアイエス

名称・(竜宮之姫(オトヒメ))

操縦者 篠ノ之樹里

製作者 篠ノ之樹里

世代 第?世代

待機状態 服(ゴシック・ロリータ)(GOSICKのヴィクトリカが着ていた物をイメージしてもらいたい)・色は白一色(よっは、白ゴス)。

カラー・白

コンセプト・動きたくないんで勝手に倒れてください。アンチIS型IS。対多戦用。

AIの名前・ひめちゃん

追記・ISのコアを機体に2個、『天罰術式』に1個使用している。通常のISのエネルギーが600だとするとこの機体のエネルギーは600000000。

またエネルギーは時間とともに回復するので実質無限。

基本武装

近接ブレード【舞姫】

・扇子型ブレード。エネルギー反射装甲になっているのでエネルギー系の武器はこれで跳ね返すことが可能。

特殊武装

シールドビット【戦わざる者】(10000機)

・その名の通り、シールドビットが10000機。実弾、エネルギー弾全て防ぐことができる。

・防ぐだけでなく、跳ね返すことも可能。

・またエネルギー弾に関しては吸収しエネルギーに変換することが可能。

【ブルーティアーズ】のビット兵器を大きく上回る機動力を持つ。

Q：操作できるのか？

A：一応天才なのである程度の制御は可能ですが、ほとんどAIに任せます。

浮遊機雷【動かざる者】（10000機）

・空中に配置すると光学迷彩で空間に溶け込み、普通のハイパーセンサーでは感知し辛い

自律行動をしており、無音移動をしながらISを探し突撃してゆく。

Q：運動神経ないのにこんなの装備して大丈夫？

A：大丈夫！動く気ない

常時展開型特殊システム：『天罰術式』

・この機体に対し、相手のIS操縦者が悪意や敵意を抱いた場合、距離・場所を問わずそのISの機能を低下・シールドエネルギーの減少、あるいは停止させる。（コアの再起動には篠ノ之束あるいは篠ノ之樹里の許可が必要になる。）

・一度姿を認識しさえしてしまえば、時間が経過してから思い返して敵意を向けてしまった場合でも影響下に入る。

・ISのコアに直接働きかけるので、防ぐことはほぼ不可能。発動にISのエネルギーは必要としない。

・ただしこのシステムはこの機体を完全解放時のみ有効。（シールドビットのみの部分解放だと発動しない。）

単一仕様能力（ワンオフ）：『一方通行』

・向き（ベクトル）を操る能力。

・運動量・熱量・光・電気量 ect といったあらゆるベクトルをIS自体あるいはビットに触れただけで感知・変換する能力。

・普段は「反射」に設定されていて、機体を狙った攻撃は全て方向を変えられ、反射される。

・大気に触れる事で風全体を操作しM7クラスの暴風を発生させたり、空気を圧縮し原子を強引に分解させプラズマを作り出し、地球の自転エネルギーを一部吸収して強烈な破壊力の攻撃に変換するなども可能。

ワタシノカンガエタサイキョウノアイエス

名称・(後藤(ごうちん))

操縦者 篠ノ之樹里

製作者 篠ノ之樹里

世代 第二世代

待機状態 ハリセン

カラー・白

コンセプト：お遊び用IS。他のISを製作するなかで出来上がったくたらないものを詰め込んでしまった作品。自分用のISの中で唯一の第二世代型。ただし、拡張領域が通常の第二世代(ラファール・リヴァイブとする)の50倍程度ある。

基本武装

ブレード【雅】

・Angel Beats!の天使が作り出すハンドソニック的なもの。

搭載兵装

近接ブレード【ネギ】

・ネギ型のブレード。ただ、ネギの形をしているだけでなく、相手を切る、あるいは掠る、罅迫り合いになるといった状況において先端の緑色の部分からネギの成分が噴出される。またこの成分はISのシールドを通過するので、目に染みる。

近接ブレード【釘バット】

・ただの釘バット。イメージのなかの不良とかがもってそうなのをそのまま大きくした物。見た目は凶暴だが、所詮釘バットなのでISのブレード等には勝てない。攻撃力的には【ネギ】に劣る。

近接ブレード【ハリセン】

・オリハルコンと言われる金属でできている。ごっちゃん最強の武装。

近接ブレード【アーマーシュナイダー】

・刀身にビームエネルギーを宿すことが出来、ISのシールドエネルギーを貫くことも可能。

・ぶつちやけ変態のISの零式白夜と同じ。(展開装甲かそうでないかの差。)

電磁ワイヤーウィップ【愛の鞭】

・一万ボルトの電流が流れる電磁鞭。

モニングスター【パンプキンシザーズ】

・モニングスターはモニングスターだよ。

火炎放射器【モンブラン】

・説明といっても普通の火炎放射器。ただしIS用ではなく一般的な物。

超高精度カスタムスナイパーライフル【サジタリアス】

・遠距離からの狙撃のみを目的として改造されている。

設置式罠【バナナの皮】

・バナナの皮をそのまま大きくしたもの。

・ただし、ただのバナナの皮と侮ってはいけない！これを踏み転んでしまうと、機体の武装が10秒間全てロックされ出せなくなる。

・また、踏んだら必ずこける不思議仕様。

設置式罠【まきびし】

・忍者がよくまくあれである。ただし、ISに効果があるかは不明。

対空武装【空き缶】

・ただの空き缶。拡張領域を大きくし過ぎて何か入れるものはないか悩んだ結果、ゴミ捨てを忘れていた大量の空き缶をつつこんでみた。

対空武装【腐った卵】

・装備した当初はちゃんとした生玉子だったのだが装備したままだったので腐った。理由としては、買ったその日はすき焼きにするつもりだったのだが束がめずらしく料理をしてくれたため嬉しさで忘れていた。

Q：卵は量子変換できるのですか？

A：篠ノ之の技術は世界一！

特殊諜報活動用シールド【ダンボール】

・このISを困えるほどの大きさになっている。

Q：なんでダンボールなんですか？ A：わからないけど、この箱を見ていたら無性に被りたくなっただ。いや、被らなければならぬという使命感を感じたと言う方が正しいかもしれない。

Q：使命感？ A：ああ。こつして被ってみると、これが妙に落ち着くんだよ。うまく言い表せないけど、いるべきところにいる安心感というか人間はこつあるべきだとう確信に満ちた安らぎのようなものを感じるのだよ？

・またこの武装だけをだすことも可能で、その時はもちろん人用。樹里一人分だけではなくほかの人の分の段ボールをだすことも可能である。

・ああ、癒される。

特殊諜報活動用シールド【ロッカー】

・ロッカーは諜報活動における必需品である。

・古来より多くのスパイがロッカーを活用し任務を成功に導いてきたとされている。

・これもまた、段ボールと同じように人用として出すことが可能。樹里一人分だけでなく複数人分出すことが可能。

特殊武装

【割りばし】・コンビニで貰える割りばし。10膳装備してある。

【スプーン】・コンビニで貰えるプラスチック製のスプーン。3個装備してある。

【紙コップ】・コンビニで買った紙コップ。30個入り。

【小麦粉】・500g×100。

【マッチ】・5箱。

【IS学園で一般生徒に配布される教科書類。1人分】・束がここに入れておいたのを言い忘れていただけ。

第五話

The underwear a girl wears is said to influence the outcome of her love .

放課後(・・・)

どうすればいいのかわからなかったので、そのまま机でぐだーっとしていた。持ち物をほとんどにも持たずにとにかく持ち物すべてISの待機状態という変な状態で、しかも全部は持ってきていない。住む場所もお金もなにも持ってない。どうしろというのだ(・・・)しかも、教室の中で変態と二人っきりな最悪な状況。しかも、さっきからチラチラこつちをみてるし。(・・・)視姦とか、やめてください。

「ああ、織斑くん、樹里ちゃん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

眼鏡が書類を片手に安心したような顔で言ってきた。なんでそんなにあわててるんだろ?(・・・)変態、なんで胸を凝視してるんですか?というか、胸しか見てないですよ。変態というかもっ、ペドって呼んだ方がいいですか?

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「俺の部屋、決まってないんじゃないですか?前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処理として部屋割り無理矢理変更したらしいです。樹里ちゃんもです。」

まあ、あの変態に関しては今頃自宅にはいろんな人が行ってるんでしょうね。変態といっても一応男で唯一ISを動かせる男人間なんだし。あと、ちゃん付けはやめてくれませんか？

「あの、ママのところに帰れないの？」くすんっ

「え!? あーそれはですねその……………夏休みとか長い休みもありますし、その時にまた織班先生に聞いてみてはどうでしょう? ね? 樹里ちゃん? あとは、電話とかしてみたらどうでしょう?」

たぶん、むりでしょうね。卒業するまで……………あれ? そういえば、赤椿渡す時に会えないかな? 会えたらいいな、会えなかったらたぶん、ママ成分不足で死にますね。

「じゃじゃあ、織班くんは1025号室。樹里ちゃんは1024号室です。樹里ちゃんは一人部屋ですが、なにかこまったことがあったら気兼ねなく言ってくださいね?」

困ったこと……………ママに会えなくて困ってます。助けてください。

私は自分に割り当てられた1024号室の鍵を開けて中に入る。そして、この部屋まですごく長かったです。思うにこの学園って広すぎると思うんですよ。すごく疲れました。まあ、途中からISの部分を使用をしてしまいましたが。運良く同室のものがいない一人部屋を手に入れ、私はなかなかの上機嫌だった。まあ、これでママがいたら完璧なんです。無理やり学園に入れられたのにいろいろと有り過ぎです。

あれ？なぜか荷物が……ママ！荷物を持ってきてくれるぐらいなら一緒に来て下さいよ!!!……………あれ？【黒鬼】が入ってませんよ？あれ？まあいいですけど。

荷物をいろんなところに……置くほどないんでベッドの横に置いときます。あれ？この部屋一人部屋なのになんでベッド二つあるんですか？まあ、あれですね！ママが来たときのためですね

ズドンッ
!!!!

隣の1025号室の方、つまりは変態と殺人鬼の部屋から騒がしい声と何かの破壊音が聞こえてくる。まあ、ここは触れない方がいいでしょう。ここは触れない方がいいでしょう。大切なことなので二度考えました。もし、扉を開けてもすればこの部屋に入りこんで来るでしょう。まあ、念のために鍵W「すまん、樹里さん。お願いします。匿ってください。まずいことになりそうなので。頼みます。頼むポイントに！」

この変態、私の部屋にাগりこんできやがりました。押し返そうにも、所詮体力は幼女、この変態の腕力に勝てるわけもなく、というか触りたくないんで入りこまれてしまった。なんですか？どんだけペドなんですか？いきなり女の子部屋に侵入するなんて、どんな鬼畜ですか？

「か……かえってよお」「ぐすんっ

これで大丈夫！『小さな女の子の涙は最強です！』説は確実です！自分で言っていて悲しくなりますけど。『かわいいは正義！』です。嘘泣きですが。

「あ、えっとお。すまん！すこしだけ！すこしだけでいいからっ！」

その言い方はなにか、卑猥です。やめてください、私にふれないうでください。同じ空気を吸わないでください。けがらわしい。ほんとに泣きそうです。

「そこまで、嫌そうな顔をしなくても……」

この変態、なに当たり前みたいな顔してるんですか。こっちみないでください。そして、そのままどこかに行ってください。その前にここから出て行ってください。

カチリ

!?この変態、鍵を閉めやがりました!!え……………なんで笑顔で近づいてくるんですか!?や、やめてください!!ちょ、まてて「ひさしぶりだな!樹理!」は?

「いや、懐かしいな!5年ぶりか?」

いやいやいや、5年ぶりですがなんでそんなにやにやとにやけ顔で近付いてくるんですか!?ちょ、もう壁にぶつかりましたよ!?ちょ、まってください!

「ほんとに変わってないな」

いや、余計なお世話です!だからこっちはこないでくださいって!

「ん?どうした?そんなに震えて、風邪でも引いたのか?」

ちょっと!?震えてるのはあなたに襲われているからであって風邪じゃ

ないですってば!!それに風邪ひいてる女の子を襲うってホントにペドすぎますよ!?そして、顔近付けて何するつもりですか!?やめ、やめてー!!……………ん?でこ……………いや、それも嫌ですよ?熱測るってやめてくださいって、ホントに。少し安心しましたが。そういえばこの変態は無意識にセクハラするんですね。でも、鼻息あらいで恐いです。

「……………熱はないようだな。ん?顔も赤くなってるみたいだし、早く寝るよ?」

だ〜か〜ら〜!はやくでていこ(コンコン) (だれかが来たみたいだ!助かった)

ドゴンッー

は?なんでいきなり?ドアこわされた……

そこには鬼の顔(注:鬼のような顔ではない)をした殺人鬼が木刀を片手にこちらを睨めつけていた。

「一夏…なにをしている!?!」

お前が何をしている!ですよ。なんで木刀なんてもってるんですか!?たしかにこの変態に襲われるということは避けれそうですが、なにドア壊しやがってるんですか!?まあ、木刀で壊れる扉だったっていうのが少しショックですが。ちゃんと弁償してもらえますよね?

……………ママが払いそうですよ。

「等!?樹里!助けてくれ!」

いやですよ!ちよ、なんで抱きついてくるんですか!?そして私の後

るに隠れるんですか!?

「そこをどけ…一夏…さっさと戻ってこい!!」

はい!どきます!どきますんでさっさと警察に銃刀法違反で捕ま
「…………この変態を連れて行きやがれです!そして、変態は何処触つて
やがんですか!ちよっ、そこ胸!胸にすこし触つてやがります!?!そし
て顔がお尻にちよっ、やめなさいってば!だから殺人鬼は!木刀振り
回すなです!なんで私に…………ちよ、ああ……………」

と、まあ気が付いたらベッドの上時刻は朝の8時

ただ、頭痛がしたので大体のことは把握できた。

早くママのところに帰りたいです。